

と言うにとどめよう。その国は、電力危機を迎えていた。とにかく電気が足りな
い。首都は計画停電が続くがそれでも需
要に追いつかなくて、電圧降下や予定外
の停電は日常茶飯事だ。少しでも供給を
増やすため、非常用の高価なディーゼル
発電機を常時回し続けているために、発
電のコストはうなぎのぼり。でも政府の
規制で電気料金はなかなか上げられない。
だから電力会社は大赤字で借金がかさ
み、いまにもつぶれそう。背に腹は代
えられないので、政府も電気料金の引き
上げを認めざるを得ないんだけど、国
民としては停電まみれなのに値上げとは
何事かとカンカン。そして電気事情の不
安定さのため、各種産業もその国にはき
たがらない。人々も勤勉で真面目だから
労働力もそんなに悪くないし、海運事情
もいいのにおかげで産業も発展せず、
工場が立地しないから失業率も高い。そ
してそれが政情不安にもつながっている。
解決策は一つで、何年も前からみんな
知っている。大きめの石炭火力発電所を

つくればよい。電力供給は一気に回復し、
停電もなくなる。発電コストも下がって
電力会社も黒字になり、しばらくすれば
電気料金も引き下げられる。産業もきて、
雇用も促進され、人々の所得は上がって
生活も向上する。ちなみに、その発電所
の用地選定も設計も環境アセスメントも
住民交渉もすんでいる。あとはそれをつ
くればよいだけ。それですべてが解決す
る。
が、建設はいつまでたっても始まらな
い。なぜか？
一つには、利権をもった政治家が妨害
工作をするというのもある。だが……も
う一つ理由があった。環境団体が反対し
ていたのだ。西側先進国の環境NGOと、
それに入れ知恵された地元（金持ちイ
ンテリ大学生の）NGOと。彼らが反対
する理由は？ 石炭火力は二酸化炭素排
出が多いから、地球温暖化を悪化させる、
というわけ。そんなものは許すわけには
いかない！
さて、あなたはどうか思われるだろうか。

ぼくはいくつか、地球温暖化に関する
本を訳している。しかも、そのほとんど
は（いやすべては）いま行われている地
球温暖化「対策」なるもの——つまり
は京都議定書など各種の二酸化炭素排出
削減策——を疑問視し、それがあまり
実現性を持たず、実現したとしても温暖
化はほとんど緩和せず、しかもそれを実
施しようとするだけでさまざまな費用が
かかり、他のことに使えたはずの貴重な
リソースをひたすら無駄遣いするもので
しかない、と主張する本だ。
もちろん、訳者が訳す本をすべて支持
する必要もない。が、この問題に関する
限り、ぼくは自分の訳した本の主張がか
なり正しいと思っている。そして、その
主張そのものに同意しない人であっても、
そこでの議論はきちんと検討するべきだ
と思う。温暖化は事実だし、それが人間
の排出してきた二酸化炭素によって（あ

ぼくが「反・CO₂排出削減派」の翻訳に

山形浩生

評論家、翻訳家

特集○
なんでも
「温暖化」のせい
に
していませんか？



こだわる理由

る程度）影響されていることも否定する
人は少ない。が、その対策として出てく
るのが、炭素排出の削減だけだというの
はあまりに変だ。他の対応手段だってあ
るはずだ。しかも削減したら、本当に地
球温暖化は止まるのか？ 本当にそれは、
みんなの心配しているような問題を解決
するのだろうか？
それを考えるために、ぼくが本業で直
面したある場面をご紹介します。ぼくの
本業はいわゆるODA（開発援助）——
特に電力部門——の経済分析を行うコ
ンサルタントだ。その業務で赴いたある
途上国で、ぼくは温暖化をめぐる議論の
縮図に出くわしたのだった。
いまここに
電力危機と温暖化
具体的な国名は挙げるまい（見当はつ
くだろうけど）。インド洋の島国だった

地元の人にきけば、地球温暖化クソ食ら
え、いまここにある電力危機をなんとか
してくれ、と言う。当然だろう。地球温
暖化で本格的な影響が出てくるのは、今
世紀も末になってからだ。それだって1
00パーセント確実ではない。その影響
を避ける手段だっていろいろある。一方
で、電力不足のためにいまここにいろ
んな人が停電に苦しみ、雇用のないこと
に苦しみ、低い生活水準を強いられ——
教育も保健もその他すべての面で満足な
ものを得られずにいるのに、環境団体は、
それでもかまわないと言うのだろうか？
その環境団体は、ぼくたちが説明会を
開くたびにやってきては、毎回同じこと
を言うのだった。とにかく温暖化するか
ら石炭はだめだ、と。いろいろ考えて石
炭のほうがいいんですよ、と言っても、
他の評価法を使えば石炭はダメだとい
うことになるはずだ、と固執する。実際や
ってみても、そんなバカな結果にはなら
ないのだけれど。いまここにある電力危
機をなんとかしないと、と人々が苦しん

や苦しみを減らせるか、を最大の尺度として考えるべきじゃないか。そして、人々が被害を受けて苦しむのは、別に温暖化だけが理由じゃない。だとすれば、温暖化だけを特別視する理由もない。ぼくが先に挙げたインド洋の島国でも、温暖化を放置すれば20年後に1万人が苦しむとする。でも温暖化対策として発電所建設をやめたら、いま5万人が苦しんでいる。そしていまの人々の苦しみは、続く世代の苦しみにもつながる。だとしたら、この国の人々は温暖化を容認していま発電所をつくるほうがいい。少なくとも、かれらにそういう選択肢があつてしかるべきじゃないだろうか。いまの人がいくら苦しもうと、とにかく石炭火力はダメ、といった物言いは、何か物事の筋をかんちがいていないだろうか。



AFP=時事

こういう議論をすると、「いや、地球温暖化では何億人が死んだり苦しんだりするのだ」と真顔で言う人がいるんだが……それってホントに数えたんですか。むしろ、温暖化を防止しないとあれこれ天変地異が起きて人類がすぐにも滅びるといふんなら、何がなんでも石炭火力はダメという環境団体の主張

でいることを訴えても、風力だの太陽光だのを使えばいい、という。どう考えてもいまの需要を満たせるだけのものはないし、つくれても値段が高すぎるんだけれど。でも何度説明しても、かれらは相変わらず同じことを言い続けるだけ。アル・ゴアも引用していることばだけれど、「何かを理解しないことで給料をもらっている人に、それを説明するのは至難の業」なのだ。

大きなお世話だ、それを決めるのは、実際にここで暮らしている人だろう。かれらの口上を聞きながら、ぼくは毎回考えてしまうのだった。いったい、だれのための、何のための排出削減なんだっけ？ さて、あなたはこう思われるだろうか？

温暖化防止は何のため？

いまの話は、特に誇張もない、ありのままの実話だ。そしてなぜこれが温暖化議論の縮図かといえば、二酸化炭素の排出削減自体が完全に自己目的化して、いったいそれが何のためのものなのかがすっかり置き去りにされているからだ。まずそもそも、いったいなぜ温暖化を防止したいと思うんだろうか。温暖化したらあちこちの水がとけて海面が上昇するから？ でも海面上昇すること自体が悪いわけじゃない。海面上昇したら、い





排出削減・理由と実現可能性

排出削減は、温暖化を防止する手段だと思われている。たとえば京都議定書は先進国が1990年の水準から排出を5・2%下げることになっていて、それを実現すべくあれこれみんな大騒ぎしている(ようなふり)をしている。これについては(後述)。そしてアメリカが参加しないというと非難轟々だ。もしアメリカがちゃんと参加して京都議定書の目標が達成されたら、温暖化はかなり緩和されるんですよね？

多くの人は何となくそう思っている。でも、京都議定書が完全に順守され、それが今世紀ずっと続いたところで、今世紀末に2・6度上昇するはずの気温が、2・4度の上昇になるだけの話だ。もちろん0・2度の差を重視する立場もある

じて(そしてこんな文章を通じて)、きちんと報せざるべきだとぼくは思っている。**排出削減論の裏にあるのは？**

こうした翻訳に対し、批判を受けることもある。書いてある内容が歪んでいるとかまちがっているとかいうのは、どんな本でも言われる話だし、それは読者がそれぞれに判断すればいいことだ。ただ特にロンボグの本については、はつきりとしたまちがいが指摘された例はほぼ皆無で、きちんと書かれた批判については、ほとんどあらゆる点について完全に反論されていることは述べておこう。

だがぼくがおもしろいと思う——そしてこうした本を翻訳してよかったと思う——批判がある。アマゾンに掲載された、エイヴァリー他『地球温暖化は止まらない』の書評の一つを見てほしい。その書評は、この本に書かれた内容は本当かもしれないことを認める(ちなみにこれは、温暖化は天然要因が大きく、人為的な部分はかなり小さいというちよつ

だろう。でも、たとえば海面上昇はどのくらい減ると思う？ ほとんど減らない。あれもこれも、このくらいの温度差ではほとんど何の差も出ない。結局、人の被害や苦しみには何ら影響はない。とすれば、いったい何のための排出削減か？

いやそれなら京都議定書よりもっと厳しい削減をすべきだ、という主張も出るだろう。でも、それって本当に可能なんだろうか。ドイツの首相は、2050年までに排出半減とかずいぶん勇ましいことを言っている。日本も洞爺湖サミットで、2050年までに6割削減とかいうむちゃくちゃな提案を画策していると報じられている。が……京都議定書がまたまった1997年以降、二酸化炭素の排出を削減できた国はほぼ存在しないに等しい(議定書の目標達成とは話がちがうことに注意)。なぜ存在しないかといえ、それがあまりに高つくため、とて

と極論を述べた本だ)。しかしながら、温暖化への懸念をきっかけにいまの大量消費型のライフスタイルを見直す気機がせつかく盛り上がりつつある。こういう本はそれに水を差すから迷惑だ、という。

この人が何を言っているか、よく考えてみよう。自分だけが正しい道(大量消費型ライフスタイルを見直すべきだということ)を知っている、それを実現するために、愚かな大衆なんかだましても構わない、かれらに本当かもしれない情報を提供されては迷惑だ、という鼻持ちならないエリート意識がここには露骨にあらわれている。これは、いまの温暖化談議であまりにしばしば見かける議論だ。こういう人に迷惑がられるなら、ぼくとしても本望だ。おそらく本誌と同時期に出る、ロンボグの新著邦訳はその集大成となるはずだ。

この批判に見られるように、先進国の多くの人々は、温暖化議論や排出削減が、なにやら優雅なライフスタイルの問題だと思っている。みんなちよつと自動車を

も困難だからだ。5%とか6%減らすことさえ、実現できていないのに、半減とか6割減とかいう議論に多少なりとも現実味があると思うだろうか？

温暖化の議論をする人々には、こうしたポイントがある程度理解してほしいとぼくは思う。それでも削減しなくてはいけない、という議論はあるだろう。人々への被害なんか関係なしに温暖化緩和が必要だという議論も不可能じゃない。

でもそれはそれで議論としてちゃんと展開してほしいと思う。こうした点をうやむやにしつつ、何となく温暖化は怖いから、とにかくできるかどうかも考えずに排出削減しなきゃ、という変な話は、無意味なだけでなく、いまずで実際に害を生んでいる。少なくとも別の見方があることくらいは——いやむしろ、変な脅しに走らないいちばん見通しの高い見方とはどんなものかは——翻訳を通

控えましょうとか、ちよつと電気を消しましょうとか、裏紙を使いましょうとかスローライフとか。でもそれは、社会全体にとつては、もつと失業者を増やせとか、もつと早死にしろとかいう話だ。そして、実際にそうした選択を、外圧によって強制されている人々がいる。冒頭のインド洋の島国を思いだそう。夜、ホテルの窓からは、首都の一部が完全に暗闇になっているのが見えた。そこでの生活はどんなものだろう。排出削減をこり押しするなら、そこに出かけて、お前たちはそのまま我慢しろ、と言えなきゃいけない。あなたにそれができるだろうか？

やまがた・ひろお 1964年生まれ。東京大学都市工学修士課程およびマサチューセッツ工科大学不動産センター修士課程修了。大手調査会社勤務。著書に『新教養主義宣言』ほか、訳書に『環境危機をああってはいけない』『戦争の経済学』『地球温暖化は止まらない』など多数。

